

教員紹介

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。今回は2017年4月に着任された基幹研究院人文科学系講師の、藤川玲満先生にお話を伺います。藤川先生は、学部では文教育学部言語文化学科、大学院では比較社会文化学専攻にご所属で、日本古典文学・近世文学を講じていらっしゃいます。



Reman Fujikawa
藤川 玲満

近世中後期の作者と 文芸形成を考える

Q ご出身、ご経歴を お聞かせください

神奈川県横浜市の出身です。学部・大学院ともにお茶の水女子大学を卒業しました。日文で近世（江戸時代）文学を専攻しました。博士後期課程修了後、お茶大のリサーチフェロー、日本学術振興会特別研究員PDを経て、2010年にノートルダム清心女子大学（岡山市）の文学部日本語日文学科に赴任し、7年間勤めました。そして、2017年4月にお茶大に着任しました。

Q 先生のご専門ご研究に ついて教えてください

私は、近世中後期の上（京都・大坂地方）の文学と出版を研究しています。とくに、秋里籬島（あきさとりと）という作者を研究対象の中心としてきました。

秋里籬島の代表作は、『都名所図会』（みやこめいしよづえ、安永9年（1780）刊）という京都の案内書で、山城国の名所旧跡の解説記事に、俯瞰図と風俗画の挿絵を入れたものです。歌枕の古歌や寺社・旧跡の故事伝承を集めたり、土地の風俗に漢詩や俳諧を添えて描くなど、非常に文学性豊かな作品です。近世中期には、文運東漸（ぶんうんとうぜん）と言って、文化の中心が上方から江戸へと移っていききましたが、この作品は、そのような時期を経た上方で出版されて、ベストセラーと言えるような

流行の書となりました。私は、この『都名所図会』について典拠研究などを行いました。

そして、作者の秋里籬島には、他にも俳諧書や読本（よみほん、近世小説の1ジャンル）など多岐に渉る著作があるのですが、従来伝記には不明点の多い人でした。そこで、俳諧や狂歌などの籬島の文学活動の関連や文壇との関連を明らかにすること、また、江戸時代には出版文化のなかで書物が制作されていきましたので、彼の著作の出版書肆（板元の本屋）の営業史の解明などを試みてきました。こうしたことを足がかりに、籬島の周縁を越えて、同時代の文芸形成の構造や知識体系を見出していくことを目指しています。



Q 日本文学を研究しようと 思われたきっかけは？

またお茶大ではどのように日文学を学ばれましたか？

小学生の頃から国語がとても好きでした。そのことが今の自分の道に繋がっていると思います。そのなかで、高校時代に「古文」がとりわけ興味深く、これを解るようになりたい、もっと知りたいという思いを抱いて古典文学を志しました。

そうして進学したお茶大の日文では、卒業論文から博士後期課程修了まで、市古夏生先生のもとで近世文学を専攻しました。先生には、

文学作品を考究することとともに、近世の出版史学や書誌学もご教授いただき、文学の形成環境を考えることの重要性を認識しました。

Q お茶大の印象はどのよう にお持ちですか？ また、お茶大生にメッセージを 頂けますか？

昨年度着任しましたとき、学内のいたる場所で、学生の頃のさまざまな場面が甦ってきて、感慨深く思いました。同時に、カリキュラムの複数プログラム選択履修制度など、新しく覚える事柄もたくさんありました。

お茶大生の皆さんは、常に真摯に勉学・研究に努めておられて、演習発表・論文・レポートなど、大変充実した成果を見せてくださいます。また、折々の日文コースの行事でも大きな力を発揮してくださって、ほんとうに頼もしく思います。

お茶大には、じっくりと自分の研究に向き合うことのできる環境が備わっていると思います。学生の皆さんには、そうした環境を存分に活かして学問と思索を深めるとともに、学界をはじめ学外の文化のなかに、勇気を持って踏み出して行っていただきたいと願っています。

■ インタビューを終えて

藤川先生の研究室の書棚には研究書が整然と並び、お部屋全体も整理整頓が行き届いて感動いたしました。テーブルの上には学生さんから贈られたという小さいウサギのぬいぐるみや素敵な置物が飾られ、明るく居心地のよい雰囲気、藤川先生のお人柄が偲ばれる研究室でした。ご多忙のところ、丁寧なご対応をいただきありがとうございます。

文責：基幹研究院人文科学系准教授
小松 祐子